



佐賀県立大学ニュース

令和11年4月の開学に向けた準備を進めている佐賀県立大学(仮称)。県内の様々な分野で活躍する方々と学長予定者である山口和範氏の座談会を行いました。県立大学に期待することや企業と大学の関わり方についてお話をいただきました。

【座談会に参加いただいた皆さま】

- 木村情報技術株式会社 代表取締役 木村 隆夫氏
- 竹下製菓株式会社 代表取締役社長 竹下 真由氏
- 社会医療法人謙仁会 山元記念病院 理事長 山元 謙太郎氏
- 立教大学 経営学部教授 山口 和範氏 (佐賀県立大学 学長予定者)

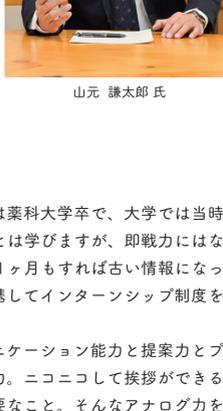
県立大学にどのような人材育成を期待されますか？

【山元】

日本の医療や介護は、専門家だけでは今後立ち行かないと思っています。いろんな業種との協調が必要で、まちづくりの一環に医療があると思っています。

高齢化の進展による医療費の増加が問題となるなか、その解決策となるのが予防医療です。長い人生を元気に過ごせるよう、地域の皆さんの予防意識を高めていくための、医療・介護の世界には閉鎖的な一面があります。

その枠を飛び越えて、私たちにはできない横のつながりを広げてくれるような人材を期待しています。漠然としたイメージにはなりますが、お祭りやイベントを企画して地域とのコミュニケーションが取れるような、自分で考えて動けるような人材をお願いしたいです。

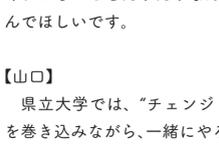


山元 謙太郎氏

【木村】

簡単にいえば即戦力ですが、これが難しい。例えば、私は薬科大学卒で、大学では当時から10年ぐらい前の薬のことを学びました。基礎的なことは学びますが、即戦力にはなりません。それと同じように大学でAIを学んでも、卒業して1ヶ月もすれば古い情報になってしまう。即戦力を求めるには、最先端の企業と大学が連携してインターンシップ制度を充実させる必要があると思っています。

また、どこ企業に行っても必要とされるのが、コミュニケーション能力と提案力とプレゼンテーション能力です。もう一つ重要なのがアナログ力。ニコニコして挨拶ができるとか、自分から話しかけられるとか、実は社会に出たら必要なこと。そんなアナログ力を持っているといいですね。



竹下 真由氏

【竹下】

佐賀で大学時代を過ごすことで、地元への理解や課題意識が深まっていくと思います。

私が気になっているのは、後継者がいないことで地方の中小企業が失われていくという現状です。うまくマッチングして事業継承ができたケースもありますが、引き継ぐ人がいないから辞めざるを得ないケースがほとんどです。

その一方で、経営に興味はあるものの、ゼロからの起業はハードルが高いという人もいます。こういった両者をつなぎ、事業継承の受け皿になり得るのも県立大学の可能性の一つだと考えています。

例えば、後継者に悩む企業を課題解決型学習のフィールドにすることで、次の世代にうまくバトンパスする仕組みづくりができるかもしれません。若い人ならではの新しい視点は、企業にとって貴重で、自分たちでは当たり前と思っていることが外から見ると、すごくおかしなことだった！なんてよくある話。ぜひ、学生の皆さんを企業にガンガン送り込んでほしいです。

【山口】

県立大学では、「チェンジ・メーカー」というキーワードを使っています。いろんな人を巻き込みながら、一緒にやろうと思ってもらえる人材を育成したい。周りとのコミュニケーションをとりながら「ここはこうした方がいいんじゃないか」と提案に持っていくようなイメージです。

学生には、佐賀を大好きになってもらいたい。そうすることで、「頑張ろう！」という気になるし、「ちゃんと理解したい」という気持ちにつながっていくはずだ。

世の中が今どういふふうに進んでいる、ということが最先端なのか敏感なリーダーを常に持ってほしい。失敗してもくじけずに何度もチャレンジして、リーダーシップや人間力を鍛えてほしい。若い人たちが繰り返しチャレンジできる環境を整えるのが私の仕事だと思っています。

県立大学の特徴の一つである課題解決型学習をどう思いますか？

【竹下】

今の若い人がどういふ視点を持っているか、どんなエッセンスを注入してくれるかが一番期待するところ。自分たちが当たり前だと思って思考を閉ざしている部分を、知らないが故に突破できることもある。私たちが「これは難しい」などと諦めてしまっている部分を飛び越えて、思ったことを言ってくれるのはすごく力強いんです。

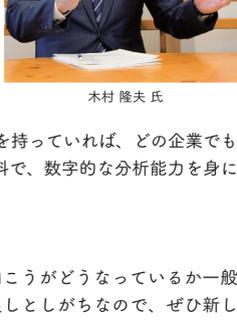
例えば以前、子どもたちと「スペースモンブランプロジェクト」に取り組んだとき、「宇宙空間でアイスを溶かさなためにどうすればいいか」という課題に対して、「保冷剤の中身(溶剤)を直接アイスの袋に塗り付ける！」という案が出てきました。ゼロ距離で冷やすためのアイデアでしたが、私たちからは絶対に出せない発想です(笑)。ビックリしましたが、面白いなって思いました。

【木村】

企業のなかでも自社の課題を見出せない人はたくさんいる。例えば「競合の他社は儲かっているのに、なんでうちは儲かってないんだろう？」とか。

私がいつも言っているのは、目標と現状とのギャップがいわゆる課題なので、それを理解できるかどうか重要だということ。現状が分かっていないといけないし、今と目標のギャップを見出さなければ解決できません。

ギャップ(課題)を見つけ出すだけで、話し合いが終わってしまうことも多々あります。ギャップ(課題)をどういふ手段で解決していくかというノウハウを持ってれば、どの企業でも応用できるはずなんです。県立大学にできる経営情報の学科で、数値的な分析能力を身につけられるといいですね。



木村 隆夫氏

【山元】

病院は、病気にならないと行かない場所で、扉の向こうがどうなっているか一般の人には分かりづらい。我々は、変わらないことをよしとしがちなので、ぜひ新しい目線で変えてほしい。

皆さんのお話しをお聞きして思ったのは、(病院が)どうやって地域と共に生きていくかということです。

当院のある、佐賀県の西部地域は医師少数区域で、医師も看護師も少ないけれど患者さんはたくさんいるという現状。医療人材が少ない中で一生懸命に患者さんのケアにあたり、地域住民の健康を考えて予防医療を行うとか、いろいろ取り組んでいるんですが、それを上手くアピールするノウハウがない。そこに新しい目線で、私たちの仕事を理解してもらえるような発信をしてもらい、知ってもらうことで地域ともっと密接な関係がつけられるのではないかと考えています。



山口 和範氏

【山口】

昭和の時代は、その時々に対応できる人材を育てるのが大学までの教育にあったと思う。けど今は、ギャップ(課題)を埋めるために説得力のある仮説を作れるかどうか求められています。

例えば、半年後とか1年後、あるいは10年後にはこうあるべきだ！みたいな設定をできるかどうかが必要で、そうなるには、いろんな領域を学ぶ必要があるし、頭の中で考えるだけじゃなく、その地域の現状を把握しながら自分の体験を通してギャップを理解する必要があります。

課題解決型の学習で学生たちがやりがちなのが、「解ける」課題を探しにいくことです。失敗してもいい、それが自分の成長につながるんだということを最初に言ってあげないと、簡単な課題に取り組みがちになってしまう。「解けない」課題こそ、ぜひチャレンジしてほしいです。

【竹下】

今聞いててちょっと思ったのが、学生が自分でテーマを設定して取り組むのではなくて、ゼミで代々引き継ぐようなプロジェクトがあってもよさそう。

地元根付いている課題って、2〜3年で解決するようなものだったら、すでに誰かが解決しているはず。もちろん一期生はゼロからのスタートになりますが、「自分ほここまで進んだから、じゃあ後輩頼むよ」って、何代もかけて地域の課題に取り組んで、佐賀を盛り上げるって素晴らしいこと。

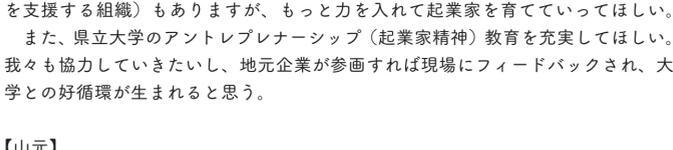
企業として、学生メンバーは変わっても県立大学と一緒にやっという話ができると思います。

【山口】

そういった点からも、県立大学に入ったらずっと学生であってほしいと思っています。

例えば卒業後も、年に1回とか半年に1回ぐらい大学に来て、「あれどうなってる？」みたいな感じで意見交換をするなど、ずっと関わってほしい。もっと言うと、何年か経った後にもう1回大学に入るということがあってほしい。

課題解決に継続的に取り組める仕組みは、必要だと思っています。



県立大学の卒業生への期待と地元企業として大学に期待することがあれば

【竹下】

地元の課題をよく分かっているからこそ、「地域を盛り上げていこう！」「産業を盛り上げていこう！」というのを率先してやってほしい。後輩に対して、「佐賀って楽しいんだよ！」と示してくれるロールモデルになることを期待しています。

課題解決型学習に取り組むことで、泥臭くても諦めずにやり続けるって能力を持ってほしい。すぐに答えを求めないでほしいんです。会社に入ってから上司に聞けば上司が決めてくれるっていうわけではなくて、まず自分で行動する、考える、試行錯誤するということのできる人材が育ててほしいですね。

そして、大学は若い人たちが集まる場所ですから、地域のにぎわいの中心になると思っています。大学を中心に人の流れができて、飲食店だったり、雑貨屋さんだったり、まちも発展すると思うので、そこも楽しみにしています。

【木村】

ぜひ佐賀からいろんな起業家を輩出してほしい。

県には「RYO-FU BASE」(DXとスタートアップをテーマに企業や起業家の成長を支援する組織)もありますが、もっと力を入れて起業家を育ててほしい。

また、県立大学のアントレプレナーシップ(起業家精神)教育を充実してほしい。我々も協力していきたいし、地元企業が参画すれば現場にフィードバックされ、大学との好循環が生まれると思う。

【山元】

佐賀に対する愛みたいなものを育ててほしいですね。一旦外に出ることで「(佐賀は)やっぱり良かった」って思えることもあります。

私も東京で過ごした経験があり、戻ってきて佐賀の良さを実感。佐賀にはそういうポテンシャルが昔からあるんです。

なので、ちょっと県外に出て戻ってくるようなシステムを作るのもいいんじゃないでしょうか。その土台になるのが郷土愛。課題解決に取り組むなかで育てられていくと思いますが、いわゆるシビックプライド(まちへの誇りと当事者意識)を持たせる大学づくりを期待しています。

【山口】

将来的に人口が減っていく中で、いろんな人たちが協力をしないとまじかかないことが多くなるはず。これから出てくる課題というのは、何か一つの専門領域だけで解決できるものではないので、企業や地域のハブになってくれるような人材として活躍してほしいですね。

そして、キーワードは佐賀愛。学生は県外からも当然来るので、大学での人材交流を通して佐賀のすごいところを発見してもらいたい。目指しているのは、県立大学で学ぶことに自信と誇りを持ってもらうこと。そうすることで、佐賀で育った時間や佐賀で過ごした4年間で自信になると思っています。

最後に一言お願いします

【竹下】

私も佐賀が大好きです。だからこそ佐賀に住んでる人たちからも、県外に住んでいる人から見ても、「佐賀って大学が増えて、もっと良くなった」って思ってもらえるようにやっていきたい。

私たちにできることがあれば、最大限協力したいと思っています。

【木村】

大学も企業もお互いに往来しやすい環境を作っていただけるといいなと思います。

【山元】

私も「佐賀って面白いことやってるな」とか、「佐賀の県立大学に入ったら絶対面白い」って思ってもらえるような大学づくりに協力したい。

もちろん失敗は許容しますから、思いっきりやってください！本当にダメなときは止めますから(笑)

【山口】

高校を卒業した人たちだけが入る大学ではなく、希望としては年齢関係なく、いわゆるエッセンシャルワーカーと呼ばれる方々にもぜひ利用してほしい。大学って普通は4年間行かないといけないけど、半年だけでもいいし、一カ月だけでもいい。様々な形で学べるような仕組みをつくりたい。

県のいろいろな人たちが集まって、交流できる場がつけられると一番いいかなと思っています。

佐賀県立大学は、ゼロから創る新しい大学です。いろいろチャレンジしていきます！！

竹下 真由氏 木村 隆夫氏 山元 謙太郎氏 山口 和範氏

プロフィール

■木村情報技術株式会社 代表取締役 木村 隆夫氏
東京生まれ。山之内製菓にてMRとして勤務し、大学病院の専属担当者として講演会のコーディネーターなどに携わる。2005年に縁のある佐賀の地に移り起業。同年、木村情報技術株式会社を設立、代表取締役に就任。

■竹下製菓株式会社 代表取締役社長 竹下 真由氏
佐賀市出身。東京の外資系コンサル企業を経て、佐賀に居る竹下製菓に入社。ブラックモンブランを宇都宮へ持ち上げるスペースモンブランプロジェクトなどを実施。2016年、父親から引き継ぎ、5代目社長に就任。3児の母でもあり、社員が働きやすい企業を目指している女性社長。

■社会医療法人謙仁会 山元記念病院 理事長 山元 謙太郎氏
伊万里市出身。東京大学医学部附属病院等で、高度急性期医療・肝胆外科領域を中心に臨床・研究に従事。地域医療に特化を移し、社会医療法人謙仁会 山元記念病院に参画。2024年に社会医療法人謙仁会理事長に就任。

■立教大学 経営学部教授 山口 和範氏
1962年佐賀県富士町生まれ。1990年から立教大学で教員を務め、経営学部長、副総長を歴任。専門は統計学、データサイエンス。2024年から県立大学の検討に関する専門家チームのリーダーを務める。佐賀県立大学学長予定者。